

2023年9月10日 久宝教会 礼拝メッセージ

「手放したことで見えるもの」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 14章 25-35節

「手放したことで見えるものがある」という言葉を聞いて、皆様は何を想像されるでしょうか。例えば、それまではいつも自動車に乗って移動していたけれど、思い切って自動車を手放して、徒歩や自転車、バスなどを利用するようにしたら、目に入る景色が違った、というようなことは想像しやすいかもしれません。また身近なものであれ、身近な人であれ、それらを失ってみてから、その大切さや掛け替えのなさに気付くということも、あるのではないかと思います。いずれにせよ、手放したり、失ったりすることは、一見するとマイナスに、否定的なことに聞こえるけれども、必ずしもそうでもなくて、そこから新しく見えるものがある、新しく出会う世界がある、と言う意味では、プラスの意味合い、肯定的な意味合いもあり得るのだ、という文脈で、この言葉は使われることが多いのではないかと思います。如何でしょうか。

先週は、台風13号の影響で、東日本を中心に各地で大雨の被害がありました。ニュースを見ていると、台風が来るたびに「線状降水帯」など、耳慣れない気象用語が飛び交うので戸惑います。そして毎回、観測史上初めての大雨であったり、降水量であったりして、「これまでに経験したことのない」と言われるような状態が、全国各地で続いています。先日の台風13号でも、場所によっては大規模な冠水があり、床上何十センチもの浸水の被害があった所がいくつもありました。水が引いてからも、浸水によって壊れたり、使えなくなった家財道具を運び出したり、家の中にまで入り込んだ泥を掻き出したりする作業があることを思うと、復旧までは気が遠くなりそうな道のりです。命だけは助かったものの、これから先のことは、まだまだ何も考えられないという方々も大勢おられることと思います。

そのような状況の中で、先に述べた「手放すことで見えるものがある」という言葉は、何の意味があるのでしょうか。甚大な被害を受け、多くのものを失った相手に対して、誰がそんな言葉を言えると言うのでしょうか。また自分が困難の渦中にある時に、このような言葉を他人からかけられたら、どのように感じるのでしょうか。恐らく、励まされるどころか、深く傷つくに違いありません。それにもかかわらず、私たちは時に、相手を慰め、励まそうとして、これに似たような言葉を口走ってしまい、

却って相手を傷つけてしまうというようなことも往々にしてあるということも自覚しておかなければなりません。「手放したことで見えるものがある」というこの言葉は、あくまでも困難な状況から何年も時間が経った後に、自分自身で自らの状況を振り返り、そのことの意味を考え直し、とらえ直した末に、たどり着く言葉なのではないかと思っています。

さて、今回の聖書のお話は、聖書協会共同訳の聖書には、「弟子の条件」という小見出しが付けられています。イエス様の所に大勢の群衆たちがやって来たので、イエス様がその人たちに対して、「自分の家族も、財産も、捨て去る覚悟がなければ、私の弟子になることはできない」というような厳しい言葉をかけられました。しかし、何だかイエス様らしくないような、厳しい言葉です。「財産やお金には執着するな」とは言ったかもしれませんが、「自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命さえ憎め」とはどういう意味でしょうか。むしろ「家族や身内は大切にしないで」と言うべきなのではないかとさえ訝しく<sup>いぶか</sup>思ってしまう。

この言葉について考えるために、実際にイエス様の弟子となったペトロたちはどうだったのかを、振り返ってみたいと思います。例えば、ガリラヤ湖で漁師をしていたペトロ、ヤコブ、ヨハネは、イエス様から声をかけられ、舟も家族も「すべてを捨てて従った」(ルカ 5:11)と書かれています。それだけの覚悟を持って、イエス様の弟子になったのだから、彼らはさぞかし立派だったのか、というと、そうではなくて、むしろ彼らの失敗する姿、情けない姿がいくつも福音書の中には記されています。そしてその度にイエス様から「信仰の薄い者たちよ」と言われています。ある時には弟子たちが、「私どもの信仰を増してください」とイエス様に言ったのに対して、イエス様が「あなた方に、もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この桑の木に、『根を抜き、海に植われ』と言えば、言うことを聞くであろう」(ルカ 17:5-6)と言われたという話もあります。つまり、吹けば飛ぶような、落としたり二度と見つけられないような、ゴマ粒よりも小さな「からし種」一粒ほどにも、弟子たちには信仰がない、「全くない」ということを強調した言葉です。舟も家族も捨てて、イエス様に従ったのに、そんな言われ方はひどいのではないかとさえ思ってしまう。

その一方で、イエス様がその信仰を評価し、褒めた人というのも、福音書には記

されています。その相手は誰かと言うと、それは例えば異邦人の百人隊長であったり(ルカ 7:1-10)、異邦人の女性であったりしました(マタイ 15:21-28)。当時のユダヤ人の常識では、異教徒である異邦人は自分たちとは違う存在であり、神様の祝福の外にいる人たちだと見なされていたので、異邦人が異邦人のままで救われる、評価されるというのは、考えられないこと、あり得ないことでした。しかし、イエス様は、ユダヤ教徒になったわけでも、イエス様の弟子になったわけでもない異邦人の百人隊長を、そのまま「イスラエルの中でさえ、これほどの信仰は見たことがない」(ルカ 7:10)と言って、高く評価されました。それは、言い方を変えれば、イエス様の弟子になるとかならないとか、全てを捨てるとか捨てないとか、従うとか従わないとか、そのようなことで自分や他人を価値判断しようとする事自体が、間違っていて無意味であるということなのだと思います。

イエス様が「憎め」「対立を恐れるな」と言われている家族についても同様でしょう。当時の「家族」というものは、現代でも似たようなところがあるかと思いますが、父権性の縦社会における家父長制家族であり、そこでは父親が最も権力を持ち、家族はその父親の財産、所有物とされていました。女性と男性では認められる権利も異なりまして、「家族はこうあるべき」「女性はこうあるべき」というような因習的な家族観が無数にありました。イエス様が言われたのは、そのような価値観、価値判断に対して見切りをつけよ、ということだったのだらうと思います。本当に大切なものを失ったら、それは塩気を失った塩のようなもの。あってもまるで役に立たないじゃないか、というのです。

では、その「本当に大切なもの」とは何でしょうか。それはイエス様がこの地上での歩みを通して示された「小さくされている人たちを大切にすること」という感性ではないかと思います。たとえ、自分の財産、舟も家族も、すべてを手放して、イエス様に従って、「弟子」と呼ばれるようになったとしても、それだけでは何の意味もない。塩気のない塩に過ぎない。教会に来ているとか来ていないとか、クリスチャンになったとかになっていないとか、そのようなことではない。そんな価値判断にこそ見切りをつけないといけない。そのように言われているのではないかと思います。

先日、ようやく多くのアイドル、タレントを輩出している大手芸能プロダクションであるジャニーズ事務所が、創業者である故・ジャニー喜多川氏の性暴力加害に

ついて、事実と認め、謝罪会見を行いました。過去40年間にも亘って、芸能界を目指してやってきた子どもたちを、絶対的な権力をもって弄んできた。その被害者の数は何百人とも何千人とも分からない、世界史上最悪の性暴力事件と言えますが、記者会見では謝罪したけれども、社名は変更しない。現社長は交代するけれども取締役としては残る。また全ての株式も前社長が所有したままと発表され、ちっとも反省の色が見られないことに驚きました。社名を変えないのは、これまで支えて下さったファンの方々のために、ということだそうですが、そこにはその名前の相手によって人生を滅茶苦茶にされた多くの被害者たちへの視点がありません。「ファンのために」という綺麗な言葉で表面を覆って、内実は何もなかったかのように自分たちはそのままに保身を図ろうとする事実隠ぺいの魂胆が見えます。世界史的犯罪者の名前をそのまま社名に残すなんて、それこそ「ヒトラー株式会社」なんて名前を付けた会社は存在していないじゃないか、という批判の声も挙がっていました。このような隠ぺい体質は、ジャニーズ事務所の事件だけに限らず、現代の日本社会全体にもはびこっている問題です。福島第一原子力発電所の核事故の「汚染水」を「処理水」と呼び換えて、報じ続けているのも、同じ隠ぺい体質の故でしょう。そしてそれは今この社会を生きている私自身にも、無意識のうちにまわりついてきているのではないかと考えています。

私たち一人一人にまわりつき、身動きがとりにくくしているものは何でしょうか。責任とか、立場とか、役割とか、様々なものがあるかと思います。しかし、それらは実は自分自身の「塩気」を吸い取ってしまっていないでしょうか。自分の「塩気」をなくしてしまっているもの。それらに見切りをつけ、それらを脱ぎ捨て、もっと身軽に、自由になることで、それこそそれらを「手放すことで見えるもの」があるのではないかと思います。イエス様について行く人に求められる福音の感性、自分の隣にいる「弱く小さくされている相手」を大切にしようとする感性、その心をもって、私たちは今週も歩み出していきたいと願っています。